外語大の歴史をとおして、激動の近代日本を知る

吉田 ゆり子

明治政府は、明治五（一八七二）年、教育の基本法令となる学制を公布し、翌六（一八七三）年四月、条項を追加し、外国教師により法学、理学、諸芸を教授する「専門学校」に対して、外国語学に習熟し専門学校に入学する予備門として、あるいは通訳等を学ぶことを目的とする「外国語学校」の区別を示しました。これにともなって設置されたのが、大阪外国語学校、長崎の広運学校、そして東京外国語学校でした。翌年四月には、愛知・広島・新潟・宮城にも外国語学校が設立され、一二月に東京外国語学校の英語学が独立した東京英語学校を含めると、官立外国語学校は八校となりました。公私立の外国語学校も八二校に及び、外国語学校の設立が盛んであったことがうかがえます。ただし、東京外国語学校以外は、すべて英語に特化した外国語学校でした。

明治八（一八七五）年、同九年と増加は続きましたが、明治一〇年二月、愛知・広島・長崎・新潟・宮城の官立外国語学校は閉鎖され、東京英語学校も東京大学の予備門となり、外国語学校は東京と大阪のみとなりました。閉鎖した外国語学校の施設は、地元の県に移管されて中学校となり、英語教育は中学校に委ねられました。明治一二年には、大阪英語学校も専門学校に転身し、外国語学校は東京のみとなりました。

この時期の「文部省年報」をみると、明治政府は、医学、農学、商学、職工学等の実学教育が必要であるにもかかわらず、教育の場が不足していることを課題としています。東京外国語学校も、商学の場とされ、明治一八（一八八五）年、歴史上、姿を隠す時期を迎えます。外国語教育の必要性が失われたわけではないはずですが、時代の要請に応じた実学教育が重視され、外国語学校は独立した教育機関として存続することさえもできない時代となりました。

東京外国語学校（外事専門学校）が、東京外国語大学に昇格したのは、戦後新制大学の制度が整えられた時です。「東京外国語大学は、外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実際にわたり研究教授し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与へ、言語をとおして外国に関する理解を深めることを目的とする」と、外国語だけに習熟することを目的とせず、外国語を学ぶことをとおして外国に関する理解を深めるForeign Studiesを目指し、発足しました。この精神は、現在の東京外国語大学学則第一条に反映されています。

本書は、明治六（一八七三）年に建学され、令和五（二〇二三）年に一五〇年の節目を迎えた東京外国語大学があゆんできた歴史を、東京外国語大学文書館が所蔵する歴史資料を用いて、文書館職員である倉方慶明研究員が一人で通して執筆しました。在学生や卒業生はもとより、外語大に縁（ゆかり）のない方にも、外語大の歴史をとおして、近代日本の政治・外交の激動を身近に感じられるよう、読みやすいサイズの本に仕上げていただきました。

ぜひ、ユニークな東京外国語大学の一五〇年間の歴史を紐解いてください。

よしだ・ゆりこ
東京外国語大学文書館前館長
日本近世史

『東京外国語大学
150年のあゆみ』
東京外国語大学文書館【編】
2023年11月刊